

国際開発学会第16回春季大会(150607)

企画セッション「経済発展のメカニズムと政策・支援:石川滋先生の貢献と現代」

開発経済学方法論での継承・発展

—「市場経済発達 段階/類型」論と「適応」の政治経済学—

柳原 透 (拓殖大学)

Email: yt_ifics@yahoo.co.jp

1

1 開発経済学方法論 —「開発経済学」の問題設定と研究方法

- 現代の途上国につき「開発イシューの適切な把握」を踏まえ「独自の問題設定」を行い、探求する。
- 現代の「経済開発」の特徴
 - (1) 経済システム面 「市場経済の低発達」
 - (2) 生産力面 「初期条件の多様さ」
- 「現代経済開発理論が発達した市場経済を前提とする経済理論に依存しており、研究対象と研究方法の間に著しい齟齬があるため、研究が制約されている」との認識
- 研究課題/方法
 - (1) 経済システムとその変化の過程 (経済発展段階論)
 - (2) 初期条件特定型開発モデル (経済発展類型論)

2

2. 市場経済の(低)発達

(1) 問題設定と研究の展開

石川 (1973) とその後の展開

- ① 市場経済の外延 (領域拡大)
- ② 市場経済、慣習経済、国家(指令)経済の併存

石川 (1975) とその後の展開

- ③ 市場経済の内包 (制度進化)
- ④ 市場経済の構成要素:
 - 「生産の社会的分業」、「流通の物的インフラ」、「市場交換の制度」、
 - 「公共財提供者としての政府の機能(と能力)」
- ⑤ 市場経済発達のメカニズム
 - 「個別経済主体および相互関係の発達」、「市場ルールの発達」

3

2. 市場経済の(低)発達

(2) 継承・発展にあたっての検討課題

石川 (1975) 基本命題 (1)

「現代低開発国の開発の困難は、資本、技術、経営能力などの全体としての蓄積水準の低さによるよりも、市場経済の低発達によるその動員・配分の困難によって生じている。」

- ① 「市場経済」および「市場経済の(低)発達」の概念規定
 - 「外延 (の拡大)」と「内包 (の進化)」
- ② 市場経済の発達に伴う政府の性格および能力の変化
 - 「学習効果」と「適応」実施能力 → 4. (1)① (スライド 14), 4. (2)② (スライド 18)
- ③ 「市場経済の低発達」の実際上の重要さ (事例) → スライド 5, 6
- ④ 「市場経済の低発達」の実際上の重要さ (一般論) → スライド 7

4

③ 「市場経済の低発達」の実際上の重要さ (事例)

(事例 1)

「潜在的な下請企業が必要とする固定資本、技術知識、経営能力は、[小企業による輸入代替生産が拡大した]耕運機企業のそれと類似していると思われる。下請企業が育たない原因としては、組立工場と潜在的下請企業との市場的連繋の欠落を中心とする市場経済の低発達がある。」

(事例 1)に関連して、自動車部品国産化比率向上を義務付けた政策が、組立工場が潜在的下請企業とのチャネルを開拓する努力を誘発し、国産化比率は顕著に上昇した、と述べられている。この場合には、政府の強制により「市場的連繋」が生まれることで市場経済の低発達が軽減された、との見解が示されているようである。

5

③ 「市場経済の低発達」の実際上の重要さ (事例)

(事例 2)

「インドの大企業にとって固定資本、技術知識、経営能力の不足はない。(i)財閥による市場支配、(ii)政府の統制による新規参入の阻止、(iii)競争排除ゆえの非効率、(iv)財閥と官僚との癒着、といった問題症候は、市場経済の低発達のゆえである。」 6

③ 「市場経済の低発達」の実際上の重要さ (一般論)

・ 「開発過程での市場経済の発達は、社会的分業、流通の物的インフラ、市場交換の諸制度、の3つのすべてにわたって、生産諸力の発達に対する適応として生じていることが多い。そのため、市場経済の低発達が開発を妨げているような実際例を見出すのは困難である。」(石川 1990)

・ 「市場経済の発達を意識的に促す(すなわちその育成強化を迫る)動機」について、生産力の発達に対応する制度の改訂の場に加えて、「文化伝播」のもとで制度改革の決定が先行する場合は指摘される。(石川 1996) → 4. (1) ② (スライド 15) 7

3. 発展 段階論 / 類型論

(1) 研究パラダイムとしての段階論と類型論

- ① 段階論と類型論の優劣比較
- ② 発展段階論—大段階論
- ③ 発展段階論—分野別段階論
- ④ 段階論の研究手法
- ⑤ 発展類型論

8

3. 発展 段階論 / 類型

(2) 継承・発展にあたっての検討課題

- ① 「段階論」は有効か、重要か、なしうるか → スライド 10
- ② 「類型論」は有効か、重要か、なしうるか → スライド 11
- ③ “石川 Lite” はありか → スライド 12

9

① 「段階論」は有効か、重要か、なしうるか

・ 「段階とは、資源配分制度の違いや、それに併行する関係者の意識構造…ほか多くの条件の違いによって区別される。この概念は分析的に不可欠というわけではなくても、オペレーショナルにはきわめて有効である。」(石川 1997)

・ 市場経済発展段階に適合しかつ発展段階の移行を促進するような政策処方箋を探究するアプローチは、中国とベトナムの国有企業の発展の初期の局面には容易に適用できたが、後期の局面では、現段階の特定でも、政策立案でも、明確さを欠いた。これは、特殊要因が重なったためであり、概念上・分析上の枠組を参照して特殊要因を適切にコントロールしながら分析することで、アプローチ自体は有効に適用しうる。(石川 1997)

・ 「[市場経済促進]アプローチを普及するには、市場経済を構成する個別市場(生産物市場、要素市場)ごと、またさまざまな政策局面ごとに、発展段階モデルを立案し、その中での現段階を確定し、それについての(段階適合的と、段階促進的との)二層的な政策オプションを特定するという仕事を積み重ねることが必要である。それはまた、特定の国グループごとに別々になされる必要がある。それは険しいけれどもやらなければならない研究課題だと思われる。」(石川 1997) 10

② 「類型論」は有効か、重要か、なしうるか

「国別開発シナリオ作成のための分析枠組み」として、3つの既成モデルを「基本モデル」とし、それらに、文化・制度・政策の類型差を加味するとともに、生産力と経済システムのそれぞれの視点から段階論の要素を加えて、地域別ないし国別に「バリエーション」が導出される。(石川 1991)

- ・ 3つの基本モデルはどれも、理論面での補強を要する。
- ・ 現代の途上国の要素賦存差による類型化は、本論文で示した基本モデルとバリエーションで尽くされてはいない。
- ・ 類型化ができたとしても、それを動学モデルとして構築するのは容易ではない。

11

③ “石川 Lite” はありか

(「石川」継承・発展度) ⇐ (「石川」度) X (採用度)

- ・ 「石川」度： 石川の研究の問題設定/方法/成果の独自さ
- ・ 採用度 ⇐ (関心の近接度) X (理解・評価度)

- ・石川の問題設定（市場経済の低発達、初期条件の多様さ）には独自の意義がある
- ・石川の段階論と類型論は難度・要求度が高い。
- ・「すべき研究」の指針とするにしても、やりきれない。
- ・そうだとすると、すべきだができていないことの自覚（“無知の知”）は、それとして意義がある。

12

4. 「適応」の政治経済学

(1) 「適応」と「文化伝播」

- | | | |
|---------------------|------------|----|
| ① 政策改革・制度発達における「適応」 | → ｽﾀｲﾌﾟ 14 | |
| ② 経済体制・開発モデルの「文化伝播」 | → ｽﾀｲﾌﾟ 15 | 13 |

① 政策改革・制度発達における「適応」

- ・「適応」とは、「(外来の)処方箋を自国の政策・制度・組織に適合するよう修正し、あるいは取捨選択してそれらと調和をはかりながら実行に移す」ことをいう。(石川 1991a)
- ・適応が行われた国では、「それに向かつての社会的な意欲とそれを実行に移すための能力が存在」しており、その背景として社会経済勢力の再編成がある。(石川 1991a)

- ・アジア諸国に共通の社会経済勢力

(1) 官僚 (①家産制官僚、②ナショナリスト、③テクノクラート)

(2) 地主・商人・富農 (3) 産業資本家・都市中産階級 (4) 都市勤労者層 (5) 農民

- ・近代化の過程での支配階級の再編

(1)① + (2)地主 ⇒ (1)②③ + (3)産業資本家

14

② 経済体制・開発モデルの「文化伝播」

- ・「ある国がある時期に採用する経済体制は、その国で独自に創造され、設計されるよりも、『文化伝播』により他国から移植されることが多い。…それがその国に定着するためには、現実の経済のテストを受けねばならない。現実になじまないときには、経済体制が現実に適応するか、現実が経済体制に適応することにより、体制と現実の乖離が…縮小されねばならない。…開発の過程はしばしばこのような適応のための試行錯誤の過程となる。…開発の成否は…適応の成否にかかると考える。」(石川 1996)

- ・「[体制モデルの]伝播の成否を決める決定的条件は、…受入れ国の現実に照らして適切であるかどうかによるよりもむしろ、それが受け入れられた後、現実との間でどのような規模でどのような調整[=適応]が行われ、最終的にその調整[=適応]が成功するかどうかにかかると考える。」(石川 1996)

15

4. 「適応」の政治経済学

(2) 継承・発展にあたっての検討課題

- | | | |
|-------------------------------|------------|----|
| ① 政策・制度改革にかかわる「適合」論と「適応」論の不統一 | → ｽﾀｲﾌﾟ 17 | |
| ② 「政府の役割」の重視と「政府の能力」の制約の軽視 | → ｽﾀｲﾌﾟ 18 | |
| ③ 「適応」、「文化伝播」、「新家産制」をつなぐ議論の不在 | → ｽﾀｲﾌﾟ 19 | 16 |

① 政策・制度改革にかかわる「適合」論と「適応」論の不統一

- ・石川は、改革の成否の決定因として、社会経済条件への政策処方箋の「適合」の有無と、不適合の場合の当該国における「適応」の有無との、両方を挙げる。

- ・援助機関との交渉を経て策定する改革プログラムの「適合/不適合」を決める要因 (石川 1990)

① 経済政策当局の予見、判断、および実施計画策定にかかわる能力

② 社会経済諸勢力への配慮からする改訂の必要

③ 援助機関による上の2点についての判断と対応

- ・「政治文化や制度・政策のいかんは、[改革プログラムの] 適合/不適合の可能性に対して重要な影響を与える。しかしそれとともに重要なことは、それらが小なり大なり不適合の要因となる際、…それらに政策的に変更を加え、適合の方向に近づけていく可能性が残されていることだ。」(石川 1991a)

- ・「[体制モデルの]伝播の成否を決める決定的条件は、…受入れ国の現実に照らして適切であるかどうかによるよりもむしろ、それが受け入れられた後、現実との間でどのような規模でどのような調整[=適応]が行われ、最終的にその調整[=適応]が成功するかどうかにかかると考える。」(石川 1996)

17

② 「政府の役割」の重視と「政府の能力」の制約の軽視

- ・石川の「適応」の政治経済学では、官僚が極めて大きな役割を果たす。(上記(1)①)
 - ・「政府の役割」と「政府の能力」をめぐる一般論に位置付け検討する要
- 「市場経済の低発達による開発の困難を除去ないし緩和するには、経済史の経験において市場経済発達の過程で見られたよりも広い分野でのより強力な政府の役割が必要とされている。」(石川(1975)基本命題(2))
- 「政府介入の背後にはしばしば市場諸力が弱体なため克服することのできない構造的開発阻止要因を計画的、政策的に排除したいという願望がある」(石川1990)
- 「多数の途上国において、開発目的のための国家の経済介入は、…とくに開発の初期段階において、資源配分と蓄積および生産性向上のために積極的役割を果たした」(石川1994)
- 「工業化が早期の発展段階にあり、したがって市場経済もきわめて低発達である国々は、より発達した国々に比べてはるかに大きく幼稚産業保護など正統的な経済政策を用いて産業を起ち上がらせる必要に迫られている。」(石川1997)
- 「これらの国々では…政府の能力は弱いであろう。…これらの国の発展段階に適合する実行可能な方法によって産業が起ち上がることを期待している。それがもし困難なら、国際協力は政府の能力不足の克服を支援することに向け集中されねばならない。」(石川1997)

18

③ 「適応」、「文化伝播」、「新家産制」をつなぐ議論の不在

「新家産制」の「新」の要素として外来要素が開発を促進しうることを強調

「新興国の国際環境への多様な接触の中で、一部のものは開発促進のために決定的重要性をもちうる。たとえば、国際援助機関がコンディショナリティとして求める経済構造改革・市場経済化、IMF、世界銀行、WTOなどの国際機関への加盟の条件として求められる国内諸制度・組織の改革・改善、先進国からの政治面における自由化や民主化の要求、などである。それらの要求を適切に捉えて家産制改革・克服の手段として用いることが可能であり、その可能性を捉えて開発を進めた国々が存在する(とくに東アジアに多い)。」(石川2008)

「適応」の政治経済学と「文化伝播」論の展開として、政治学の立場からの継承発展が期待される

- ・「段階移行」に関わるような要素と「所与の発展段階内」に限られる要素との区別
- ・体制全体に関わる「適応」と所与の体制内での個別要素における「適応」との区別
- ・表面上の変化と実態としての変化の区別
- ・小変化としての「適応」の継続・拡大がやがて家産制からの段階移行をもたらすのか、それとも、画期をなすような大変化が必要なのか

19

結 語

石川の研究姿勢

- ・「問題設定が現代開発途上国の開発イシューの…適切な把握を土台としてなされ、独自の問題領域を探求し、それに迫る」
- ・徹底した実践志向を持ち、個別国の現実を様式化し問題発見をすることを重視しながら、同時に理論としての定式化を志向する。さらに、概念レベルにとどまらず個別具体の政策提案の基盤になるような実証研究を追究する。
- ・根底に、途上国開発への使命感、研究者としての責任感、途上国開発への日本の貢献を図らんとする義務感

継承・発展の課題

- ・石川が設定した研究課題は重厚、なすべきことのリストは長大。
- ・難度・要求度は極めて高く、実務家は言うに及ばず研究者の間でも、畏敬すなわち敬遠の対象とされ、孤高の趣が強い。

⇒ 石川独自の「問題設定」(「市場経済の低発達」、「初期条件の多様さ」)を継承する

“石川 Lite”の模索

20